授与機関名　順天堂大学

学位記番号　甲第 1925 号

日独戦役における海軍病院船「八幡丸」の医療活動

(Medical Operation of The Hospital Ship “Yawata-maru” in The German-Japanese War (1914-1915))

柳川　錬平（やながわ　れんぺい）

博士（医学）

論文審査結果の要旨

本論文は、東日本大震災のあと一部の国会議員らから持ち上がった病院船保有の議論に呼応して内閣府が行った調査の成果として公開された報告書において、日本が過去に保有した病院船についての検証が十分とは言い難いものであったことに対する問題意識を契機に、病院船史という新たな研究分野を開拓する中で得られた成果物である。

日本が過去に保有した病院船の中でも、第二次世界大戦で活躍した「氷川丸」などが比較的細部まで解明されているのとは対照的に、「忘れられた戦争」とも称される第一次世界大戦で運用された海軍病院船については、開戦から１００年が経過してもなお詳細は不明のままであった。本論文では、大正初期に日本海軍が運用した病院船「八幡丸」の唯一の公式記録とされる「大正三、四年戦役海軍衛生史　巻四」を、第二次世界大戦後に接収され米国議会図書館に所蔵されていた日本関連文書の中から発掘して、かつて日本が運用した病院船としては初めて赤道を超えて外洋に進出しながら医療活動を行った「八幡丸」の構造、人員、診療実績などを解明し、先行研究の誤謬を指摘した。さらに大正初期の医療や疾病構造などに関する他の史料とも比較しつつ解析したことで、「八幡丸」が日清戦役の「神戸丸」に始まる近海仕様から、赤道を越えて南太平洋においても医療活動を展開し得る遠洋仕様への転換点と位置付けられることを初めて解明した。

以上の通り、本論文は日本の病院船史において長らく放置されていた空白部分を補填しつつ、先行研究の少なからぬ誤謬を是正することにも成功した、医史学的に意義ある論文であるとともに、今後の病院船に関する国家的議論に資することも期待され得る、古今を通じて極めて希少な船舶医療についての論稿でもある。

よって、本論文は博士（医学）の学位を授与するに値するものと判定した。